

「美」の判断基準の発達と障害児教育（I）

西 信高*・池内慈朗**

Nobutaka NISHI and Itsuro IKEUCHI
The Development of Criteria of Aesthetic
Judgement and Special Education (I)

Abstract : Psychological Approach on Aesthetic Judgement to find what is a criteria of Aesthetic Judgement. What is beauty and how are we to measure it in view of personal tastes and values? A question of considerable importance in the literature on beauty concerns the origins of these preferences for individuals. Several researchers have examined this question and found, for example, that adults and children use similar standards in evaluating the attractiveness of others. The evidence from several facial studies tells us something about the concept of beauty; it reassures us that although there is some variation in tastes, beauty is by no means entirely in the eye of the beholder.

In addition to approach on the evidence from ethological and neurological studies tells us facial cognition and facial preferences. Also we discuss cultural or environmental influences on perceptual cognitive differences.

Based on the evidence in this area we have concluded that it is not appropriate to apply major theories of artistic growth to the development of general aesthetic judgement.

Also, we have concluded that aesthetic judgement for natural thing, such as landscapes, human faces, are probably shaped innately.

I. はじめに

本稿は、「美」の判断基準の発達について考察したものである。

これまでの美意識の研究について言えば、美学、所謂哲学的アプローチが大勢を占めており、美術教育の分野における実証的研究も「視覚形態を人々、とくに子どもに美的に知覚させる能力の開発に関する研究が相対的にきわめて少ない」(Eisner, 1972) 状況にある。審美眼

の能力の発達、「美」を分かるようになる能力、「美」の判断基準の発達に関しての科学的解明をめざした研究、発達心理学的な審美眼の解釈等々についても同様である。

ところで「美」の判断基準といっても、「美」に関する定義には曖昧なものがある。美学の分野では、プラトン(428/427B.C.-348/347B.C.)以降今日まで、2,500年近くも「美」とは何かという議論が続けられている。「美」とは何かという問題に直接触れることは一応おくとして、ここでは心理学的な問いとして「美」は見る人にそれぞれ同じように感じとられるものであるのか、そしてまた、逆にだれにでも同じように感じとられる「美」

* 島根大学教育学部障害児研究室

** ロンドン大学・教育学大学院

というものは存在するのか、といった問題の検討を行うこととする。そのことを通じて、「美」とは何かという問題に迫ることになると考えている。

心理学, 美術教育学, 人類学, 脳神経科学の研究成果をとりいれながら, まずアートに関しての「美」の判断基準を, そして続いて人間の容貌に関する嗜好性における普遍的価値の存在, 育った文化や環境などの知覚への影響などについても考察する。

II. アート性の発達およびアートにおける美の基準に関する諸理論

子どもの描画の発達に関しては, 古典的なビクトル・ローウェンフェルドの研究をはじめ, R・ケッロッグの発画の研究 (Kellog, 1964) や, 子どもの描画の発達を知能の発達という視点よりとらえたJ・グッドナウの研究 (Goodnow, 1977) などがその代表的なものとして挙げられる。

ビクトル・ローウェンフェルドは, 描画の発達段階を, つぎのような6段階に分けている (Lowenfeld, 1937)。

- 1: なぐり描きの段階 (年齢: 2~4歳)
- 2: 様式以前の段階 (4~7歳)
- 3: 様式化の段階 (7~9歳)
- 4: ギャングエイジの段階 (9~11歳)
- 5: 推理の段階 (11~13歳)
- 6: 青年期における危機の段階

アートを鑑賞する際に適用される美の基準についての最近の研究の一つとして, パーソンズ (Parsons, 1987) の5段階認知発達理論がある。これは, ピアジェ派の認識発生論とも多くを共有しており, 同時に道徳性の発達に関するローレンス・コールバーグ (Kohlberg, 1969) の認知発達理論の影響をも強くうけているものである。パーソンズは, アートを理解していく過程の発達は段階的に進むもので, その順序はすべての人間に共通しているとする。認知心理学の枠組みのなかで, ピアジェが科学と論理の発達を, コールバーグが, モラルの理解の発達を説明したように, パーソンズは, 子どものアートの鑑賞力やアート性の理解に関しての発達心理学的な解釈を行っている。

- ステージ1: 好みの時期 (年齢: ほぼ就学前の児童期)
- ステージ2: 美と写実主義の時期 (小学生時代)
- ステージ3: 自己表現期 (青年時代)
- ステージ4: スタイルとフォーム期 (ほぼ大学時代)
- ステージ5: 自己と経験期 (個人によってばらつきあり)

ステージ1: 好みの時期 (だいたい就学前の児童期) においては, 判断は根本的に好みに根ざし, ステージ2: 美と写実主義の時期 (小学時代) は, リアリズムの範囲の中でのみ判断し, 嗜好を論じる。ステージ3: 自己表現期 (青年時代) になると, すでに形成された主観が美の判断基準に関わるようになり, したがって, 解釈は個人のバックグラウンドによって異なってくる。ステージ4: スタイルとフォーム期では, 自己の評価をより明確にしながらも, 他者の意見と照らし合わせてチェックする。そしてステージ5: 自己と経験期に至ると, アートの伝統や権威主義にとらわれるのではなく, 価値を自ら問い, その変革を志向することとなる。つまり, 絵画などのアートに照らして, 自らを評価する。

パーソンズ (Parsons, 1987) のこの5段階は, 次のレベルに達するにはかならずその前のステージを経なければならないとされる。つまり, それぞれの段階には順序性が存在する。この点では, ビクトル・ローウェンフェルドの発達理論と同様である。パーソンズの研究は, 彼の20年にわたる観察が基礎になっている。しかしながら, パーソンズの5段階発達理論はアートの鑑賞についてのみとりあげており, アート以外のその他の「美」についての発達については, 言及していない。

III. 一般的な基準に関する諸理論

「美」に関して議論する以前に, 「美」とはなにかを一応定義する必要がある。だれにでも共通する「美」の判断基準は存在するのか, その根本的な「感覚で感ぜられる美」に相当する何か感性認識というものはあるのか, といった問題でもある。

素材感情 Stoffgefühl あるいは感官感情 Sinnengefühl は, 対象の感覚的質に感官が触発されて生ずる直接的・原初的感情のことである。例えば, 我々は「赤い色」に対して, そこから「危険」ということを感じ取るよりも以前に, ある種の動物的とも言えるような興奮を感ずるのであろうし, 同様にして「青い色」に対しては鎮静感を, さらに「緑の色」に対しては何か安らぎのようなものを感ずる (武藤ほか 1985)。

この論考では, 武藤らの言うような, 「美」の判断基準を「素材感情」, その根本的な「感覚で感ぜられる美」の認識にのみ限定して, 議論を進めて行くこととする。

1. 美の認識の発達

自然物 (草花, 木, 森, 山, 湖) や人間の容貌に関する「美」の判断基準の発達は, はたしてビクトル・ロー

ウェンフェルドの理論やパーソンズの5段階理論とは異なった発達過程をとるのであろうか。あるいはこれらの理論を適用できるのであろうか。

この問題について、美学の見地から検討する。

「美」は、自然の中にも、見い出せ「自然の美」は、自然の中に存在する。また「美」は、「感覚で感ぜられる美」「理性によって発見されてくる美」に分けられる (Imamichi, 1987)。また美学史のなかでは、個人の感性は(1)感性認識から(2)理性認識とに分けられるという (武藤ほか 1976)。

グッドマン (Goodman, 1976) によれば、美的認識は、(1)感性認識から(2)理性認識へと移行していく。次つぎに生まれていく人工物を、理性で認識し、シンボル・システムとしての「美」とされるものを美として認識していく過程としてとらえられる。またガードナー (Gardner, 1989) は、アート活動は常に精神活動であるとみなし、それに関わる物は常にそのシンボル・システムを読み書きできなくてはならないとする。アートの読み手は音楽では多岐にわたるスタイルを聞き分けることができ、そして詩や小説においてはその比喩的内容を識別できる。

ノーベル医学・生理学賞受賞者ジョン・エックルスは、「美学は知性と情動的の両方の価値を持ち、前者はとくに前頭皮質に、後者は辺縁系に依存している。これらの二つの系は密接につながっている」(Eccles, 1989) と述べている。脳神経学的な視点からも、「美」の認識が(1)感性認識から(2)理性認識へと発展するという考えがみられる。

2. 美の認識における普遍性

ここで問題とする美的認識は、本能に近い原初的な感覚、視覚的直感の側面に注目したものであるが、その素材感情、その根本的な「感覚で感ぜられる美」の認識には、普遍的な判断基準のようなものが存在するのかどうか。

ロンドン大学のアイゼンクは、アートや色見本や各種デザインについても客観的で普遍的な基準は存在するという立場を、多くの分野での研究から導きだしている。アイゼンクは、Good Tasteの因子としてT因子を導き出した。T因子が社会文化的条件や人種の差、美術の専門家と素人等々の区別をこえて関与し、あらゆる人に共通した嗜好判断の基準をつくりだし、その結果、美的判断には普遍性が生じていると結論した。その後、イギリス、エジプトそしてまた日本での実験からもこのことが確認されたという (Eysenck et al. 1971, 1975)。

エール大学のチャイルドを中心としての、異文化間での美的嗜好傾向に関する研究も有名である。アートの分野においても、Goodness of form「形態の善し悪し」が存在するという意見である。チャイルドとイワオは、日本の山里の村に住み、ほとんど西洋の美術に触れたことのない陶芸家でも、アメリカの高校生の美的判断以上にアメリカの美術専門家に近い美的判断をくだすことを見いだした。お互いの文化に未知であっても、継続的に美術に接している人々の間には、視覚アートに対する嗜好に著しい類似性がみられ、同じ文化圏に生活していても視覚アートにほとんど接していない人々には、そのような類似性が見いだせなかった (Iwao, & Child, 1966)。また、フォード、プロセロ、チャイルドは、フィジー諸島や地中海のキラデス諸島のクラフトマンの美的判断は、アメリカの美術専門家に近い美的判断を示した (Ford, Prothero & Child, 1966)。アメリカン・インディアンも、ほぼ同様にアメリカの美術専門家に近い美的判断を示した (Child, & Siroto, 1966)。

また、これらの研究は、そうした専門家においては、視覚アートに対しての美的判断の発達の段階がある高レベルにまで達していることを示しているといえる。ローウェンフェルド、パーソンズ、ガードナーらの描画の発達理論を適用すれば、アメリカの美術専門家や日本の山里の村に住む陶芸家、そしてキラデス諸島のクラフトマンのように継続的に美術に接している人々は、継続的に接していないアメリカの高校生よりも美的判断の段階が発達していることとなる。また、これらの研究は、前出のパーソンズの認知発達理論 (Parsons, 1987) を裏付けることにもなっている。

3. 文化環境による知覚への影響

ある特定の個人が見ているものは、はたして他の人や他の人種の人の目にも同様に見えるか。育ってきた文化環境のちがいで、知覚に差が生ずるのか。

文化と知覚の問題を考えるうえで、錯視の研究は興味ぶかい資料を提供してくれる。

錯視の問題を異文化間で比較検討した研究がある。直角や四辺形そして直線などによって構成される西洋的環境の中で成長してきた人々は、このような環境で育たなかった人々と比べて、ミューラー・リヤーの錯視図で錯視量が大きくなる (Segall, Campbell and Herskovitz, 1966)。 (図1)

ボラックは、アメリカ合衆国の皮膚の色の濃い子どもと薄い子どもの間での錯視量を比較したが、予想どおり皮膚の色の濃い子どもの方がミューラー・リヤーの錯視

量が少ないと結論づけた (Pollack and Silvan, 1967)。

ハーバード大学のオルポートとベティグラーは、丸いシェーブのものが美的な理想とされる南アフリカ共和国ナタール州のズル族を対象に研究した。ズル族の文化では、角のある形よりも丸い形が美的には理想とされ、小屋、家畜の囲い、畑、戸口、その他の多くのものが丸い形をしている。ズル語には円形をさす単語はあるが、四角をさす単語はない。オルポートらの実験では、直線遠近法を示唆するある種の幾何学的錯視量が少なかった (Allport, Pettigrew, 1957)。西洋社会などの直線の多い生活と、ズル語の円形の多い生活とでは、知覚にも差が生まれてくる。このことは、美的なもの基準ですらまったく異なっている可能性を考えさせる。

詩人の串田孫一は、自然の中で直線を見いだすとすれば水面くらいのものであると言う。われわれが日常的に目にしている直線は、人間の造りだしたものであり、あくまでも人工的なものである。直線についての知覚は、近代社会の文化によって影響を受けている例のひとつであると言える。我々が絵を見るとき、視線は左から右へ移動するといわれるが、これらの知覚方法も文化の影響をうけてのものではなからうか。またアラブ世界では、文字は右から左へと書き、そして読む。であるならば、当然西洋の言語圏の人々とは認識の方法の違いは生ずるであろう。

つぎに色に関して、人々は同様の認識の仕方をしているのであろうか。例えば、人は青系統の色には冷たい感じを覚え、赤や黄系統の色には暖かい感じを覚えるとされる。色に対してのその文化内でのシンボリックな意味を除いたとして、なお普遍的な感じ方をしているのであろうか。色に対する感覚は、生得的なものであろうか。異文化間における色の認識の違いに関する研究を、以下にとりあげる。

様々な文化圏における色の命名法については、一例として、カリフォルニア大学バークレイ校のエレナ・ロッシュの、ニューギニアでの研究がある。ニューギニアのダニ族はいまだに石器文化の種族で、色に対して2色しか呼称がない。すなわち、暗い冷たい色に相当する語「ミリ」と、明るい暖かな色に相当する語「モラ」のみである。実験では、一つのグループには、他の文化のほとんどにみられるような自然な基本的色相の範疇(青、緑、黄、赤)に基づいたあたらしい色彩用語を作って教えた。二番目のグループには、別の色彩用語を作って教えた。結果は、色彩知覚の自然な傾向性に従ったグループは、あまり自然でない色彩用語を与えられた者たちに比べて、約2倍の速さで学習したのである (Rosch, 1973)。

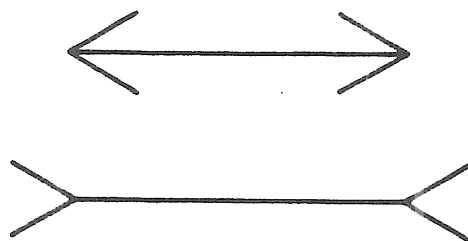


図1 ミューラー・リヤーの錯視図

カリフォルニア大学バークレイ校のバーリンとケイ (Berlin, & Kay, 1969) は、98の異なった文化を調査した結果、つぎのような結果を見いだした。もし、ある文化が(ダニ族のように)色を表す用語を二つしかもたないとすれば、黒と白である。もし三番目の用語があるならばそれは赤であり、四番目と五番目は黄色とグリーン、もしくは青と茶のどちらかの対が先きて、そして紫、ピンク、オレンジが最後の四色として命名される (図2)。

しかし、ガードナー (Gardner, 1987) は、これらの色の命名順に関する研究を批判している。色の知覚が文化の呼称行為を方向づけているとするよりも、むしろ、人間の知覚器官そのものが、より広範な文化的関心によって利用されている、というのがその要点である。またサーリンスも、意味論的な見解に基づいて批判している。色は、20個のサンプルの色片、つまり西洋技術の任意の発明とはまったく無関係であり、むしろ、生と死、高貴と平凡、純粋と不純といった、文化的にきわめて重要な差異を象徴するものとなる。我々の文化においてさえ、赤や黄、あるいは青や緑などの用語は、政治、肉体的状態、宗教などの情動的な領域における意味のある区別を強調するために割当てられているのだ、としている。そして、この意味論的展開を採用することは生物学を無視することではなく、生物学に然るべき位置をあてがうことであるとも述べている (Sahlins, 1976)。

これに関連して、生物学に然るべき位置をあてがった研究としてボーンステイン (Bornstein, 1973) を挙げると、彼は、黄色の眼球色素の生理学的特徴との違い(紫外線被曝量と土地の標高、赤道への距離など)および食物などの違いが、色に関する認識を一定程度規定するとしている。これによれば、文化環境や人種が違えば色のみえ方も違ってくる可能性があることになる。

ガードナーはまた、「レヴィ・ストロース流に、知覚系(大きくは、心)を、文化の道具として、また、人間の文化的活動によって利用されるべき組織体として考え

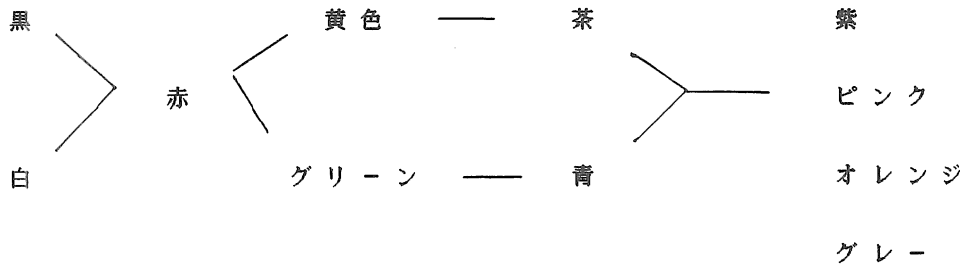


図2 色の命名順序

るべきである」という。

ギブソンは、知覚は記憶または過去の刺激によって左右されること、つまり知覚というものは、今ここでどのように知覚するかを基盤を成す過去をもっているという。

今日の認知心理学者が考える視知覚理論では、〈知覚〉＝〈感覚素材〉＋〈経験に基づく知識・意味・推論・判断〉とされている (Miller, 1967)。

以上のような概観から、知覚は文化によって影響を受けるものと言える。すなわち、文化環境によって知覚もまた変化するということになる。

IV. 容貌に関する判断基準の普遍性とその生得性

1. 容貌に関する判断基準

つぎに人間の容貌に関しての美的判断の研究をみてみよう。古くは、チャールズ・ダーウィンの従兄弟である天才フランシス・ゴルトンは、合成肖像技法をもちいて、人工的にいく人かの容貌の部分部分を寄せ集めて女性の顔の写真をつくりあげた。結果は、すばらしく印象的で理想的な容貌であった。そして彼は、美しい容貌に必要な条件は極端さがなくことであると結論づけている (Galton, 1883)。

ロンドン大学のウィルソンとナイアスは、人の好みは多様であるにせよ、美は、それを見る人にだけ美と映るわけでは決してないという立場をとっている (Wilson and Nias 1976)。つまり、魅力的な容貌については多数の人間の間で意見の一致をみると主張している。84枚の女性のスライドを多数見せ、それぞれの女性について魅力程度を五段階尺度で評定させた。結果は、判定者の間で顕著な一致があった。男性判定者と女性判定者の間には、有為な差がみられなかった。判定者の性別、評定者の年齢、社会的地位、出身地域などの諸要因は、女性美の評定にはなんらの影響も及ぼさなかった (Kapera, et al. 1971)。また他の研究によれば、成人も子どもも、

容貌の魅力の評価するに際しては同じような基準が適用されていた (Longlois, 1986; Longlois & Stephan, 1977; Murayama & Miller, 1981; Sorell & Nowak, 1981)。さらに、異なった人種の間でも、魅力の評価における共通性がある (Cunningham, 1986; Kleck, Richardson & Ronald, 1974; Stephan & Longlois, 1984)。

これらの研究を総じていえば、容貌に関する嗜好性は、人種、年齢、職業的ステータス、地理的慣習等々を超えて普遍的に共通するものと結論づけられる。

人間は魅力的な容貌を好む (Ilife, 1960; Kapera, Maier & Johnson, 1971)。ある研究によれば、日刊新聞の読者4,000名以上に対し、女性の容貌写真12枚に「美」の観点から順位をつけさせた。それらの写真の示す魅力の程度の幅は狭いものであり、「大変美しい」とか、「不器量」と呼ばれているものは省かれていた。結果は、男女、老若、ウェールズ人、スコットランド人、ロンドン市民などといった評定者の性や年齢そして出身地に関係なく、一定の傾向を示していた (Iliffe, 1960)。

言うまでもなく、人それぞれに好みの容貌というものがあことは、日常的に経験するところである。これは、個人の思い出、思い入れ、感情などがかかわっているためといえよう。ここでとりあげた嗜好性はあくまでも視覚的直感のレベルのものであって、人格については問題にしていない。

乳幼児は、美人を好む、という実験がある。生後20週の乳児は、はじめてのものよりも、すでに学習したデザインと顔にはより多く注意をむける。また、視覚経験はそれらの傾向を急速に拡張させる (Fantz, Fagan & Miranda, 1975)。また、人間が魅力的な容貌を好むのは生得的であるとする研究もある (Bowlby 1958; Cunningham, 1986; Kleck, Richardson & Ronald, 1974; Longlois et al., 1987; Stephan & Longlois, 1984)。

ロンドン大学のウィルソンとナイアスは、「健康な配偶者が好まれることの進化論的意味は明らかである。お

そらく、これこそつやつやした肌を美人の要素の一つとして強調する基盤であろう。肌の状態は健康状態を示すすぐれた指標である (P.58 Wilson & Nias, 1976)。艶のある肌など、人がだれでも共通の魅力を感じる「はば」は、限られてくるのである。

細い目の人でもぶくれの容貌をもつ人のことを「平安時代に生まれていたら美人とよばれていたろう」とか、あるいは「不器量」な人でも、時代が違えば「美人」とされるというようなことがしばしば言われる。

ポーラ文化研究所の村澤博人氏は、髪型の流行に似合う容貌型があり、容貌の似合う髪型には流行があるという。

平安時代から室町時代までは主に垂髪であったから、その髪型に似合う容貌はどちらかというところの丸容で、丸容が好まれた。逆に細面の容貌と垂髪がマッチするかどうかを考えれば、おのずと決定される。ここでいう丸容は、「都風俗化粧伝」の例が示すように、かなり幅をもった表現である。その後、髪が結い上げられはじめ、鬢が張り出すようになる江戸時代中ごろまで、このふっくらした丸容の傾向はつづく。鬢とは頭の左右側面にある髪をいう。井原西鶴は「好色一代男」で「丸容桜色」、「好色一代女」では「当世容貌はすこし丸く、色は薄花桜にして」目、鼻、口、耳が十分そろっていることが、当時理想とする美人の条件であったと記している。当時の髪型では鬢は後に引っ張られていたので、容貌全体の輪郭は横に広がることはなかった。丸容で十分バランスがとれ、似合っていた。ところが、江戸も後期になり、歌麿の美人画に代表されるように髪型も鬢が横に張り出し、つとと呼ぶ後髪が上がり、鬢が大きく発達してくると、容貌はやや細めとなり、瓜実容貌が似合う＝好まれるようになる。その理由は鬢の張出しと大きくなった鬢は髪の部分のボリュームを増やし、丸容容ではいっそう頭でかちに映り、似合わないためと思われる (村澤, p.141-142 1987)。

また、髪型と容貌型の、似合うかどうかのバランス感覚がいつの時代にも存在したという (村澤, p.140-143 1987)。

その時どきの髪型の流行に似合った容貌が、あったわけである。現代では、髪型のうつりかわりがはげしすぎるが、過去のその時どきの髪型に似合った容貌型であってかつ美しいと判断される人が、やはり「美人」とよばれ、カテゴライズされたのではなからうか。

容貌が美しいとされるに必要な条件は、極端さがないこと (Galton, 1883) であり、かつまた容貌の各部分のバランスがよいことであろう。ギリシア時代のアート作品は、数学的バランスのよさが、美の基準となってい

た。似顔絵を描く際、山藤章二や他の多くのイラストレーターが口をそろえて「美人や美男子は描きにくい」と言っている。なぜならば、美人や美男子は容貌の“くせ”が少ないからであるという。

このことは、裏を返せば、「化粧」は極端さをカバーし、容貌の各部分のバランスを修正するものであるということになる。化粧は、容貌の良いところの魅力を強調するものでもある。たとえばファウンデーションは、肌の毛穴を目立たなくさせ、光の反射をよくさせる。艶のある肌を美人の要素の一つとする見解もある (Wilson & Nias, p.58, 1976)。

川口哲夫氏は、「めんたんぴん」という著作のなかで、日本人の容貌を6種類に分類している。

モンゴリアン：大陸の遊牧民族によく見かけるタイプの容貌。有名人ではビートたけし、加藤登紀子。

ミカドニアン：面長の容貌と切れ長の細い目。かつての支配者階級の貴族など。明石家さんま、田中裕子。

ドラグーン：中国古美術に出てくる貴婦人のようなノブルな顔立ち。沢田研二、松坂慶子。

ヤマタイ：丸みのある、愛嬌のあるタヌキ容貌が特徴。中森明菜、近藤真彦。

トロピカル：パッチリ目の情熱的な顔立ち。南洋の海洋民族をルーツにもつ。時任三郎、薬師丸ひろ子。

オリジン：濃い眉毛、ゴツゴツした輪郭。アイヌの血を受け継いでいる。長嶋茂雄、石原真理子。

これら6種類の他、各タイプのミックス型が存在する (川口哲夫, 1987) 単一民族とされている日本人ではあるが、日本人の容貌もバラエティーに富んでいることになる。過去に諸民族が日本へ移り住んだ経緯をうかがわせる。諸民族の遺伝子が、容貌という表現をとって後世まで息づいているともいえる。

これらのタイプのなかから江戸時代の浮世絵に出てきそうなタイプの美人を選ぶとすると、ドラグーン、ミカドニアン：面長の容貌と切れ長の細い目、であろう。ヤマタイは、人なつこい下町娘で、浮世絵の美人やお姫様役は、似合わない。トロピカルもオリジンもエキゾチックすぎて似合わない。

これらの6種類の各タイプのもつ容貌や雰囲気、その時代の流行の髪型ともfitしていたのではあるが、髪型と容貌型の似合うかどうかのバランス感覚がいつの時代にも存在した (村澤, p.140-143 1987)。

2. 判断基準の生得性

我々には感覚的に把握される美が存在すると述べてきたが、それを可能にする解発機構が生得的に備わってい

る。この点に関して、以下に動物行動学の研究をもとに考察しておきたい。

コントラート・ローレンツは、かわいらしいものの標識として、丸い顔、ちいさな容貌のわりに高くはり出した額、相対的に大きな目、小さなおちよぼ口、胴に比べて大きな頭、丸みを帯びた体形その他を挙げている。我々がごく簡単なモデルにも原始反射的に反応するということは、我々人間も同様に生れつきの解発機構をそなえていることを意味する (Lorentz, 1943)。

アイブル・アイベスフェルトは、小さな子の特徴として、頭と胴の比率を指摘している。つまり、比較的小さな胴の上に大きな頭がのっているのである。モデルを探し出す名人であるウォルト・ディズニーは、たとえば頭でっかちで胴のちっぼけな子犬をしばしば漫画の主人公にしている。これは見る人にかわいらしいという印象を与える。ディズニーのパンビも愛らしい (Eibl-Eibesfeldt, 1974) (図3)。また、アイブル・アイベスフェルトは、ほほえみが生得的である動作であると述べている。ほほえみは、生後2ヵ月から4ヵ月くらいの乳児に現れる。これはいかなる人種、文化の乳児にも同様に現れる。ローレンツのいうかわいらしいものに対して反射的に反応する解発機構と同様に、ほほえみによって親たちは愛情や愛着を一層強く解発される。さらにこの動作は、目の見えない子どもや、目と耳が両方とも不自由な子どもにも現れ、学習ではない本能に近い動作であるとされる (Eibl-Eibesfeldt, 1974)。

社会生物学者のE.O.ウィルソンは、人間の種々の生得的特性の存在を信じている。ヘビ、クモ、高所、閉所、雷雨、水流など、古代人をとりまいた最大の環境の危険から固体の生存と繁殖を保障するために、進化の過程で生得的な恐怖という感覚が備わってきたとする。また彼は、チョムスキーのいう言語の習得の能力、コールバーグのいう道徳性の発達も、種々の生得的特性の一つとしてあげている (Wilson, 1978)。

すでに述べた容貌の美的判断に関する多くの研究や幼児の美人を長く見ていた実験などから、「美」は、それを見る人だけに美とうつるわけでは決してなく (Wilson & Nias 1976)、容貌の「美」の評価の妥当性と普遍性が存在することが理解できる。容貌に関しての審美眼の発達には、明らかにローウェンフェルド (1937)、ケッログ (1964)、パーソンズ (Parsons, 1987) などの認知発達理論とは異なった過程をたどる。描写の能力の発達は、美“意識”の発達とはその過程が違っている。ローレンツやアイブル・アイベスフェルトなどの動物行動学、そして今日ヒューマン・エソロジーと呼ばれる分野の研

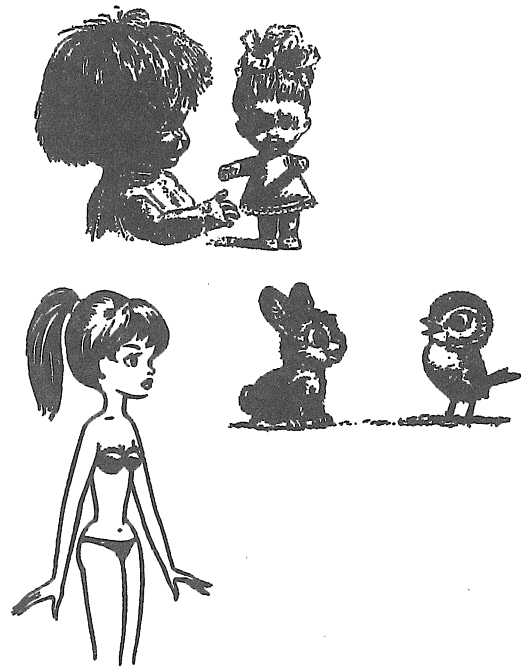


図3 (Eibl-Eibesfeldt, 1970)

究からすれば、容貌に関しての客観的な美の基準をきめる審美眼が解発機構ともいべきかたちで、人間にも生得的に備わっていても不思議ではない。

3. 生得的な生理学的基礎

人は人間の顔に似たものを好む傾向をもっている。ある実験で、生後4ヵ月の乳児にでたらめなデザインの顔や人間の顔に近いものなど4種の顔刺激を与えた (図4)。結果は、人間の顔に似てはいるがめっちゃくちゃなデザインであるものよりも、人間の顔に似ている刺激に対してより長時間凝視した (Haaf & Bell, 1967)。生後24時間の新生児でも、ピカソの描くような非現実的な顔よりも自然な顔の絵を好んだ (図5)。また、人の顔の絵に対する注意持続時間が2ヵ月から12ヵ月の間は次第に減少していき、12ヵ月から36ヵ月にかけては増加するという。この事実はアメリカ人の子どもばかりでなく、グアテマラの村に住む子どもにも、またカラハリ砂漠に住むブッシュマンの子どもにも認められている (Mussen et al. 1984)。

これらの事実は、一部の脳の発達が他の部分よりも進んだことを意味し、美の判断が止まったわけではない。

先に述べた乳幼児の人の顔の認識に関する実験から、このような認識が生得的である可能性が強く示唆される

のであるが、face neuroneの発見はそのような見解に根拠を与えるものとなっている。

オックスフォード大学のエドモンド・ロールズとデビット・ペレット、プリンストン大学のチャールス・ブルースは、人の顔にのみ反応するフェイス・ニューロン（容貌細胞）を発見した。フェイス・ニューロンは、側頭葉の中央を前後方向に走る長い溝から発見された。サル顔やヒト顔の絵によく反応し、目のない顔や不完全な顔の絵では反応が弱まる（図6）。

デスモンド・モーリスは、子どもに好かれる動物のベストテンとして、①チンパンジー、②サル、③ウマ、④ブッシュベビー、⑤パンダ、⑥クマ、⑦ゾウ、⑧ライオン、⑨イヌ、⑩ジラフを挙げている。実験の結果から、彼はこれらは擬人化に適した特徴を十分に備えているためであるとしている。これらの動物に共通する特徴のうちではつぎのようなものが目立っている。(1)すべて羽毛やうろこではなく毛をもっている。(2)まるみをおびた外形を備えている。(3)平らな容貌をもっている。(4)容貌に表情をもっている。(5)小さな物体をいじることができる。(6)姿勢はある程度直立的であるか、ときに直立姿勢をとる (Moriss, 1967)。

人間には、意味をおびた視覚的な形象を岩や雲などの自然物の中に見いだす。期せずしてできた像を「チャンス・イメージ」という (Janson, 1968)。チャンス・イメージを逆手にとって成功したアーティストは多い。マックス・エルンスト、ホガース、ブリューゲルなどの作品ではよくこれが見られる。古代人は、洞窟の岩壁の期せ

ずしてできた像を動物の一部として応用して描いている。このような「チャンス・イメージ」がアートの起源とも見ている美術史家も多い (Gombrich, 1972)。ピカソは、自転車のサドルとハンドルで構成された牛の頭部や、オモチャの自動車で作った沸々の顔で「チャンス・イメージ」の応用を見せている (図7)。

インクプロットのそれぞれが何にみえるかを問う「ロールシャッハ検査」は、精神医学的診断に用いられている。

擬人化するという、つまり顔に似たものを見いだし好むという傾向は、なんらかのかたちでフェイス・ニューロン（容貌細胞）を刺激しているのではなからうか。そのような考えにたてば、「美人」とは、容貌のバランスがよいために目にも心地よく映り、したがってニューロンのインパルスがよく流れている、というようにも解釈しうる。

京都大学霊長類研究所の小嶋氏は、笑った表情にだけ反応するニューロンを発見している。デビット・ペレットによれば、紙を引き裂いた時にのみ活動するニューロンや、毛皮を手でなでた時にのみ活動するニューロンなど、様々な奇妙なニューロンが上側頭溝から記録できるという (三上, 1991)。「おばあさん細胞仮説」によると、乳児がおばあさんを何度も見ているうちに、細胞に情報が集約され、次第に“おばあさん細胞”に成長していくという。

デスモンド・モーリスが、子どもは擬人的な特徴のひとつとなる顔の表情をもっているものを好むと言い、また顔の笑った表情にだけ反応するニューロンが存在する

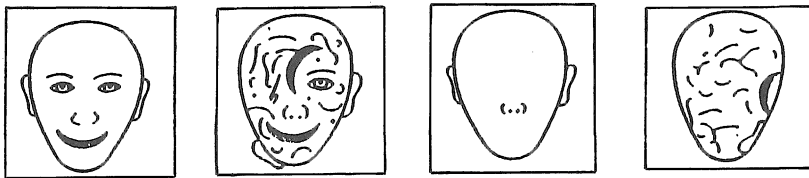


図4 (Haah & Bell 1967)



図5 (Hershenson et al., 1967)

ということなどを考え合わせると、顔に似たものへの反応は比較的低次の機能に属するものと見なされる。そして、理性認識のシンボル体系とは関係のない感性認識に属するものであることも、ここから推察できる。ただし、幼児が美しい容貌を認識する能力が低次の機能に属するものであると結論づけるには、なお今後の脳神経科学やその他の分野の研究を待たねばならない。

V. 結 論

本論考で試みたのは、「美」とは何かではなく、「美」は見る人に同じように美と感じられるのか、また、逆に誰にでも同じように感じる「美」というものは存在するのかといった問題であった。このような角度を変えたアプローチも、「美」とは何かという本質的な問いに迫る一つの方法とも考えられる。

以下、本論考で導き出したいくつかの結論と、それに関しての考察を述べる。

1. 万人の容貌に関する「美」の判断基準は、普遍的でそれには妥当性が存在する。ここに取り上げたいいくつかの容貌の美的判断についての研究から、男女、老若、年齢、地域、職業に関係なく、「美」は普遍的なものである。時代が映り変わっても、髪型、顔型とのバランス感覚がいつも存在していたということは、バランスが「美」を感じる普遍的な判断基準の重要な要素となっていることをうかがわせる。

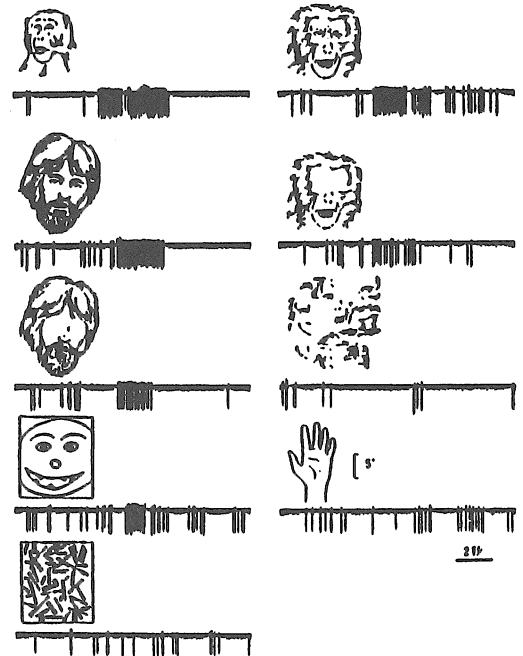


図6 (岩井栄一「脳—学習・記憶」より)

日本人の容貌の分類に関する研究に触れたが、その分類に共感できるとすれば、それはそれぞれの特徴を同じように感じていることによるのであり、目、口、鼻の大きさやバランスの良さによって「美」と感じる素材感情ともいえる普遍的な判断基準のようなものが共通に備わっ

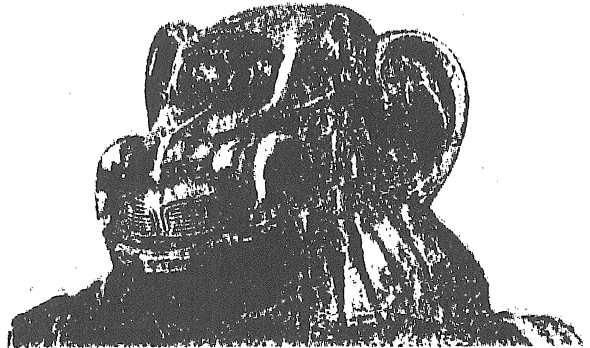
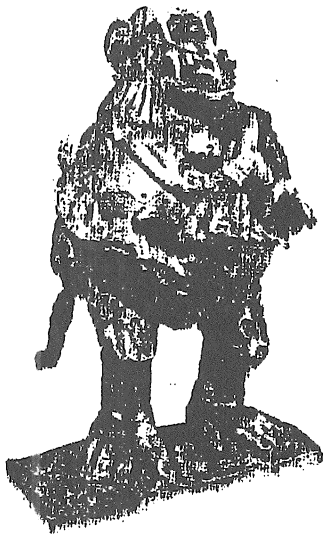


図7 ピカソ作「獅々」

ているゆえ、と言えるのである。

2. アートの「美」の判断と、容貌に関しての「美」の判断とは異なった判断基準をもちいている。

アートの「美」の判断基準の発達は、その個人の育った文化、環境、社会の中で、そのシンボル・システムを学習することによって実現される。理性認識は、ここでは、理性で認識し、シンボル・システムとしての「美」とされるものを美として理解していく過程である (Goodman, 1976; Gardner, 1991)。

今後「美」とは何か論ずる上でも、アートの「美」の判断基準と容貌に関しての「美」の判断基準とは、同一直線上で議論されるべきではないと考えられる。

容貌に関する美的判断についての諸研究からすれば、新生児から大人まで、「美」は、それを見る人にだけ特有に美と映るわけでは決してない (Wilson & Nias 1976)。

このことは日常的な経験からも類推できることでもある。例として挙げれば、センスが悪い、アートが分らないという市井の人の間でも、美人が分かるのはなぜか。アートの分らない人は、アートを特に学んだわけでもない。美大生の「美人」の認識とそのような人の「美人」の認識とは、両者がアートを理解する程度の違いほどには大きな差はない。それは、容貌に関しての「美」の判断基準は、シンボル・システムに属さない客観的な基準、感性認識のレベルのものであり、美しい人を美しいとする判断基準は誰にでも原初的・生得的に内在しているからである。

ローレンツやアイブル・アイベスフェルトなどの動物行動学的研究から導きだせる仮説として、人には、容貌に関しての客観的な美の基準をきめる審美眼が発発機構ともいえるようなかたち生得的に存在しているということがある。人間の進化の歴史から考えれば、人間と自然の間わりは200億年以上であり、自然への美意識そのものが、進化の過程で生得的なものとして備わったとしても不思議はない。アートなどの人工物の歴史は、たかだか数千年である。美意識の基準は容貌や自然の風景などの自然物に対しては、特に生得的ともいえる客観的な基準が存在する可能性が高い (Ikeuchi, 1991)。

3. 人間は、アートと容貌に関して、異なる認知のシステムを有している。

容貌の「美」の認識は、アートに関しての理性認識のシンボル体系とは関係のない感性認識に属することが推察できる。容貌の認識は素材感情にちかく、表情にも反応する。また顔のみ反応するフェイス・ニューロンの発見などから、顔の認知は比較的低次機能であることが次第に明らかにされつつある。笑った表情にだけ反応す

るニューロン、紙を引き裂いた時のみ活動するニューロン、そして毛皮を手でなでた時のみ活動するニューロンなど、さまざまなニューロンの存在が提起されてきている。「おばあさん細胞仮説」によると、乳児がある特定のものを繰り返し見ているうちに、細胞に情報が集約され、次第にその特定の「細胞」に成長していくことになる。デモンド・モーリスは子どもが擬人的な特徴のひとつである顔の表情をもつものを好むというが、これも「おばあさん細胞仮説」を適用するならば、それに類似するものを見たときにフェイス・ニューロンが刺激されるのだと解釈される。「チャンス・イメージ」、つまり期せずしてできた像を見出すのも、毎日見ている特定のものに近いものということで、その特定のニューロンが刺激されたことによると解釈しうる。大人や幼児が美しい容貌を認識するという情報処理の方法は、〈素材感情〉にほぼ近い低次機能のものであることは徐々に確かめられつつあると言える。

4. アートの「美」の判断基準と容貌の「美」のそれとは、異なった発達過程を示す。アートの「美」の基準の発達は、段階的に進む (Lowenfeld, 1937 Parsons, 1987)。一方容貌の「美」の基準の発達は、段階的ではない。

描写の能力の発達などとはその過程が異なる理由として、つぎのようなことが考えられる。

パーソンズの発達理論では、アートの「美」の解釈は、ステージ3：自己表現期 (青年時代) 以降において、個人のバックグラウンドによって多様性をもってくる。「絵が描けない」「なぜピカソがいいのか分らない」などは、しばしば耳にすることばである。「どの段階で発達が止まるかは、どれくらい作品に出会うか、どこまで本人が触発されるかによる」(Parsons, 1987) のであり、それはちょうどコールバーグのいう道徳性の発達は育った文化によって到達するステージがちがってくる (Kohlberg, 1969)、というのと同様なのである。

一般的には、シンメトリー (対称形) がアシンメトリー (非対称形) よりも好まれる (Day, 1967)。しかしながらアート家や創造的な人は、その逆にアシンメトリー (非対称形) をシンメトリー (対称形) よりも好む (Barron, 1965)。アートに常に接している人と接していない人とは、好みがちがっているといわれる (Child & Siroto 1966; Ford, Prothero & Child, 1966; Iwao & Child, 1966)。アートにおいて、遠近画法の3D (三次元) の認識ですら近代社会の中で習うものであって、生得的ではない (Hudson 1962a, 1962b)。日常的にアートに触れる機会に乏しければ、アートの「美」の基準の

発達が遅り (Child, & Siroto, 1966; Ford, Prothero & Child, 1966; Iwao & Child, 1966), つぎのステージに進むことが困難となる (Lowenfeld, 1937; Parsons, 1987)。

ところが容貌の「美」の解釈は、個人のバックグラウンドによって左右されない。美しい人の顔を美しいとする感覚が誰にでも存在し、それはまた自然発生的と考えられるのである。アートの「美」の基準の発達は表現・鑑賞においても年齢に応じたスキルが必要であるのにくらべて、システムの理解などは必要なく、自然な発達をとげるのである。

5. 環境は知覚に影響を及ぼす。

知覚は文化によって影響を受ける。そのなかで生まれ育った文化が、知覚の様式を特徴づける。美的なものの基準ですらも異なってくる。同じものがある文化においては「美」になり、またある文化においては「美」とはみなされない。同一物が「美」にも「醜」にもなるという可能性を含んでいる。

ケニアのスルマ族では、下唇の大きさが「美」のしるしとされるようであるが、しかし彼らは確かに下唇の大きな女性に感覚的にうっとりするような「美」を感じているのであろうか。「感性認識」の美を覆い隠していると考えられはしないか。この問題は今後の検討課題である。

引用・参考文献

Allport, G. & Pettigrew, T. (1957). Cultural influences on the perception of movement: the trapezoidal illusion among Zulus. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 55, 104-113.

Barron, F. (1965). The psychology of creativity. In Newcombe, T.M. (Ed.), *New direction in psychology II*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

Berlin, B. & Kay, P. (1969). *Basic color terms: Their universality and evolution*. Berkeley: University of California Press.

Bornstein, M. (1973). The psychophysiological component of cultural difference in color naming and illusion susceptibility. *Behavior Science Notes*, 8, 41-101

Bornstein, M. (1979). Perceptual development: Stability and change in feature perception. In M. Bornstein & Kessen (Eds.), *Psychological*

development from infancy: Image to intention (pp. 37-81). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Bowlby, J. (1958). The nature of the child's tie to his mother. *International Journal of Psychoanalysis*, 39, 350-373.

Child, I. & Siroto, L. (1966). Bakwele and American esthetic evaluations compared. *Ethnology*, 4 (4), 349-360.

Cunningham, M.R. (1986). Measuring the physical in physical attractiveness: Quasiexperiments on the sociology of female facial beauty. *Journal of Social and Personality Psychology*, 50, 925-935.

Day, H. (1968). The importance of symmetry and complexity in the evaluations of complexity interest and pleasingness. *Psychonomic Science*, 10, 339-340.

Eccles, J.C. (1989). 「脳の進化」伊藤正男訳 東京大学出版会

アイブル=アイベスフェルト (1974). 「愛と憎しみ」日高敏隆・久保和彦訳 みすず書房

アイズナー, E.W. (1972). 「美術教育と子どもの知的発達」仲瀬律久他訳 黎明書房 (1986)

Eysenk, H.J. & Iwawaki, S. (1971). Cultural relativity in aesthetic judgements. *Percept. Motor Skills*. 32. 817-818.

Eysenk, H.J. & Iwawaki, S. (1975). The determination of aesthetic judgement by race and sex. *Journal of Social Psychology*. 96. 11-20.

Ford, C., Prothero, E. & Child, I. (1966). Some transcultural Comparisons of esthetic judgement. *The Journal of Social Psychology*, 68, 19-26.

Fantz, R., Fagan, J. & Miranda, S. (1975). Early visual selectivity: As a function of pattern variables, previous exposure, age from birth and conception, and expected cognitive deficit. In L.B. Cohen & Salapatek (Eds.), *Infant perception: 1. Basic visual processes* (pp. 249-345). New York: Academic Press.

Gardner, H. (1989). *Zero-Based Art Education: An Introduction to ARTS PROPEL Studies in Art Education*. 30, 2.

ガードナー, H. (1989). 「アート, 精神そして頭脳」仲瀬律久・森島共訳 黎明書房 (1991)

ガードナー, H. (1987). 「認知革命」佐伯胖・海保博之監訳 産業図書

- Galton, F. (1883) *Inquiries into human faculty and its development*. London: Macmillan.
- ゴンブリッジ, E.H. (1972). 「芸術と幻影」 瀬戸慶久訳 岩崎美術社
- Goodman, N. (1976). *Languages of Art*. Indianapolis: Hockett Publishing Co.
- グッドナウ, J. (1977). 「子どもの絵の世界」 須賀哲夫訳 サイエンス社
- Haaf, R.A. & Bell, R.Q. (1967). A facial dimension in visual discrimination by human infants. *Child Development*, 38, 895.
- Hudson, W. (1962a) Cultural problems in pictorial perception. *South african Journal of Science*, 58 (7), 189-195.
- Hudson, W. (1962b). Pictorial perception and educational adaption in Africa. *Psychologica Africana*, 51, 267-73.
- Ikeuchi, I. (1991). Research Proposal for University of London, Institute of Education Doctoral Program Dep. of Art Design and Dep. of Philosophy: The development of aesthetic judgement in young children: Is human preference for natural beauty innate? (博士課程・博士論文計画書として提出)
- Ilife, A. (1960). A study of preferences in feminine beauty. *British Journal of Psychology*, 51, 267-73.
- 今道友信 (1989). 「美について」 講談社現代新書 講談社
- 岩井栄一 (1989). 「脳-学習・記憶」 朝倉書店
- ジャンソン, H. (1968) チャンス・イメージ「アイコンゲネシス」 ヒストリー・オブ・アイディアズ 22 西野嘉章・松枝到訳 平凡社 (1987)
- Kapera, Maier & Johnson, (1971). Perception of physical attractiveness. *Proceedings of the 79th Annual Convention of the American Psychological Association*, 6, 317-18.
- 川口哲夫 (1985). 「めんたんびん」 JICC出版局
- ケログ, R. (1964). 「児童画の発達過程」 深田尚彦訳 黎明書房
- 串田孫一 (1982). 「美意識の発生」 佐々木斐夫編 東海大学出版会
- Lorenz, K. (1943). Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung, *Z. Tierpsychol.* 5, 235-409.
- ローフェンフェルド, V. (1937). 「美術による人間形成」 竹内清・堀内敏・武井勝雄 共訳 黎明書房 (1939)
- ラムズデン・C.J. & ウィルソン, E.O. (1935). 「精神の起源について」 松本亮三訳 思索社
- 三上章充 (1991). 「脳はどこまでわかったか」 講談社現代新書 講談社
- ミラー, G.A. (1967). 「心理学の認識」 戸田・新田 共訳 白揚社
- モリス, D. (1967). 「裸のサル」 日高敏高訳 河出書房新社 (1969)
- 村澤博人 (1987). 「美人進化論・顔の文化誌」 東京書籍
- 武藤三千夫・石川 毅・増成隆士 (1985) 「美学/美術教育学」 勁草書房
- Parsons, M.J. (1987). *How we understand art*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pollack, R. (1970). Müller-Lyer illusion: effect of age, lightness contrast and hue. *Science*. 170, 93-94.
- Rosch, E. (1973). Natural Categories, *Cognitive Psychology*. 4. 328-50.
- Sahlins, M. (1976). Colors and Cultures, *Semiotica* 16. 1-22.
- Segall, M., Campbell, D. & Herskovitz, M (1966). *The influence of culture on visual perception*. Chicago: Bobbs-Merrill.
- Sorell G.T. & Nowack, C.A. (1981). The role of physical attractiveness as a contributor to individual development. In R.M. Lerner & N.A. Busch-Rossnagel (Eds.), *Individuals as Producers of their development: A life-span perspective* (pp. 389-446). New York: Academic Press.
- Stephan, C. & Longlois, H.J. (1984). Baby beautiful: Adult attributions of infant competence as a function of infant attractiveness. *Child Development*, 55, 576-585.
- ウィルソン, E.O. (1978). 「人間の本性について」 岸由二訳 思索社
- ウィルソン, G. & ナイアス, D. (1976). 「愛のミステリー・愛と性の心理学」 岩脇三良・宮本蒼子訳 思索社